禁欲主義ないし禁欲道徳について

豊　田　　剛

「禁欲」という考え方は、さまざまな側面から考察されうる。この語の元になったギリシア語アスケオーの最初の意味は、単に「技巧的、技術的に作りあげる、加工する」であったといわれる。更にその意味が拡大されて、たとえばクセノフォンやエピクテートスにおいては、「身体的、体育的な鍛錬」と同じ意味で使用されるようになり、そして最後に知恵や徳を目指す人間の「精神的訓練、陶冶」をさすようになったとされる。プラトンではこの語は「正義、知恵、徳の訓練」(『ゴルギアス』、『エウチュデモス』) の意味で使われている。禁欲といえばすぐストア派が想起されるほどだが、ストア派においては特に思考と衝動を統御することが強調され、禁欲は断念、放棄として理解される。禁欲が宗教的意味をおびるようになると、観照や神観へと向う精神的な道程の前提をなすことになり、諦念ないし断念となる。そこから謙譲や克己の訓練という意味も容易に生じうる[1)]。

ざっと見ただけの「禁欲」という用語の使われ方のうちにも、この概念の持ついろいろな要素があらわれており興味深い。特に注目すべきなのは、それが「訓練」「訓育」即ち自己を一定の目的にかなうように鍛えるという意味あいを持っていることである。これは「人格の完成」でも「徳の実現」でも何でもいいが、ある目的を達成するための有効な手段として「禁欲」を位置づけるものである。従って「禁欲」自体が目的とされているわけではない点が重要である。ストア派の場合[2)]でも勿論そうなのだが、それ以外の宗教上の修行（断食苦行、性的抑制、禁酒等）についてもそれはあてはまる。これは何も宗教的な事柄に限られるわけではなく、一般の日常生活においても、何かをなしとげるためにはそれに集中する必要があり、それ以外の他のものに向けられるエネルギーを制限ないし制御（禁欲）することはよくあることであって、決して珍

しいことではない。

このように「禁欲」ということの本質は、とりわけ、何らかの課題を達成するための「手段」というかたちの実践にあることが確認される。ところが問題なのは、得てして「禁欲」それ自体が自己目的化されてしまう事態がけっこう生じるという事実である。つまり何かのための「禁欲」ではなく、「禁欲」自体が一つの価値とされ、目指されるべき目標となってしまうのである。それでは何故「禁欲」するのか、何のための「禁欲」かという肝心な点がとんでしまい、あくまで「手段」であったはずの「禁欲」が「目的」となる転倒が生じることになる。それの何が問題なのか。それは宗教のもたらす幾多の弊害がおのずと語っているところである。そうなると「禁欲」は他からの異論や吟味を一切よせつけない独断的独善的な自己主張になる。「禁欲」という名の本尊が神聖不可侵の存在として祭壇に安置されてしまうと、しかもそれが単に個人としてではなく組織的に信じられるとなると、どこまでファナティックな暴走が起こるかわかったものではない。実際、古代の原始キリスト教成立期には、それがしばしば生じたのではなかったか。

「禁欲」とは文字通り欲望の制御、禁止を意味する。その際何がその制御の対象なのかを確認することが先決となる。人間は欲望に流されやすいものとよくいわれるが、その欲望の中味である。身体的な意味で考えれば、食欲、性欲、睡眠欲等人間の生存に欠かせないものがあるし、所有欲のように物や金銭を手に入れたいとするもの、また名誉欲のような精神的な意味の欲もある。こういったいろいろの欲に対応しながら生きているのが人間なのである。しかしいくら人間が自由だからといって、各人が好き放題に欲望の追求に邁進してよいとすれば、社会の安定は望めない。だからこそ欲望の自由な追求に歯止めをかけることが必要とされ、そのために法や道徳はあるということができる。法や道徳の存在が社会の安寧、秩序維持という目的に資するための発明物であることは大事な点である。従って広い意味では、法や倫理上の規則なども「禁欲」という役目を担っていることになる。その意味である程度の「禁欲」は社会生活を営む上で必要な制約である。従って欲望追求の自由を制限する必要性

ということなら、規模の大小を問わず、どんな社会にもみられる普遍的現象であるといってよい。

ここで問題にしようとするのは、無意識のうちに守ることを強制されているような、ゆるい意味での「禁欲」ではない。人間の生の根拠に働きかける「禁欲」、人間の「生」自体を強く縛る「禁欲」である。

人間が生きるということは自己の生命を維持することである。そのために基本的に衣食住は欠かせないが、それらはすべて「自己保存」という目的を達成するために必要とされるものである。カントも『道徳の形而上学』(1797) 倫理学原理論で、動物的存在者としての人間の自分自身に対する義務として「自己保存」を第一のものとしてあげ、これを「自分自身に対する完全義務」(拘束性の強い義務) としている。従ってこの自己保存の反対、つまり自己の動物的本性を好き勝手に破壊することは、全体的破壊としての自殺であれ、部分的破壊としての肢体切断、毀損 (カストラート) であれ、明白な義務違反となる。だから人格性の放棄としての自殺はしてはならない (§6) とされている。これはよくわかる。しかし人間は「自己保存」さえ心得ておればいいというわけではない。種の保存、つまり人間の再生産も必要である。そのためには「性」はどうしても欠かせない。性愛は基本的に種族保存のために与えられているとみられるので、この能力をその目的以外に、たとえば快楽のために用いていいかが問われる。ストア派などでは、結果として偶然伴う快楽をその行為の目的とすることは本末転倒とする主張があり、カトリックは現在でもその考え方をくずさないが、アナクロニズムというしかあるまい。ただ自分の性的性質を不自然に、目的に反して使用すること (自慰、同性愛、獣姦) は義務に対する背反 (§7) とされている。更に、暴飲、暴食、泥酔、麻薬の使用といったことは、不節制による自己麻痺として、人間の品位を堕落させるもの (§8) と見做されている。

我々は「禁欲」問題を論じる本稿で、「性」の問題に重点をおくことにする。それが一番重要と思われるからである。

原始キリスト教成立時の社会を考えてみても、性的禁欲が大事な課題とされ

ていたことがうかがえる。当時キリスト教の異端とされたグノーシス主義にもそれはみられる。しかし別に古代に限らず、それ以降も、キリスト教の思想のうちには一貫して「性」に対して否定的な発想が見てとれる。これはどういうことなのか。イエスが処女から生まれたとする愚かしい作り話のうちにも「性」の蔑視をうかがうことができる。イエスだけが特別で他の兄弟姉妹（マルコ 6-3）は普通の性行為によってマリアから生まれたということなのだろうか。それはともかく「性」に対してネガティブな態度がキリスト教思想の根底に通奏低音のように常に流れていることは否めない。

となるとなぜこういう考え方が出てくるのか、またどうしてそれが支持され、影響力を持ちうるようになるのか、を考えてみる必要がある。というのもそれは明らかに人間の「自然」に反する発想だからである。「性」によって人間の再生産をはからない限り、人間は亡ぶしかない。人類の存続のためには、次々と子孫を作り、それが連綿と継続することが求められる。人類が生き続けていくためにどうしてもなくてはならいのが「性」だとすれば、それを貶め否定することがどれほど不自然なことであるかは改めてことわるまでもない。ではどんな社会なら、こういう考え方が持ち出され支持されるのであろうか。それも考えてみなければならない課題である。

本来、「性」も含め様々な欲望は人間の生を促進する原動力である。しかしそれを無制限に放置していては社会の安定は保てないから、そのために法や倫理が人間の合意に基いて、或いは支配のために強制的に作り出されねばならなかった経緯については既述の通りである。しかしここであげるような「性」の否定はそういうレベルの話ではない。極端な現実無視といってもよいほどの暴論なのである。こんな不自然な反自然的思想が完全に実行可能である筈もなく、それで人間が滅んだという報告もないので（実際には小集団でそれによって亡んだ例もあったかもしれないが）、恥ずべきことだとか良くないことをしているのだといった後めたい気持をもってであれ、「性」行為はなされていたと考えるしかあるまい。しかしそういう制約のもとでは、いきおい「性」は隠れて行うべき恥かしい行為として歪んだいびつな姿をとらざるをえない。フロ

イトが「性」の抑圧が神経症の原因になると主張したのも、人間には健全な性的欲求の満足が必要であるからであり、それが自然だということである。どうしても必要だからこそ人間に与えられている性的能力や性衝動を否定するような発想がまともなものである筈がなく、それが高じると性的衝動があることすら恥ずべきこととされるに至り、極端な場合には自分で去勢する者すらあったことが『福音書』（マタイ 19-12）[3] からもうかがえる。性的欲求があること自体が罪だと考えられたため、その源を断ってしまえば清浄な体（？）になれるということだったのだろうか。ここまで「性」を貶め厄介者扱いするのは正気のさたとも思えないが、『新約聖書』に描かれている社会では、こんな考えが使徒たちによって語られていたようである。たとえば当時も「結婚してもいいでしょうか、むしろ独身のままがいいでしょうか」などといった質問が信者から寄せられていたことがうかがえる。それに対する答は「男子は婦人にふれないがよい。しかし不品行に陥ることのないために、男子はそれぞれ自分の妻を持ち、婦人もそれぞれ自分の夫を持つがよい。」（第 1 コリント 7-1 ～ 2）、「次に、未婚者たちとやもめたちとに言うが、わたしのように、ひとりでおれば、それがいちばんよい。しかし、もし自制することができないなら、結婚するがよい。情の燃えるよりは、結婚する方が、よいからである。」（同 7-8 ～ 9）、「だから、相手のおとめと結婚することはさしつかえないが、結婚しない方がもっとよい。」（同 7-38）といったものであったことがわかる。

パウロが独身でいることを最善としているのは上述から明らかだが、問題はその理由づけである。この文脈（第 1 コリント第 7 章）で主張されている一番大事なことは、「時は縮っている」（7-29）という認識である。「最後の審判」が今すぐにも起こるような「危機」の時であるから、「現状にとどまっているがいい」（7-26）と考えられている。「この世の有様は過ぎ去るから」（7-31）である。つまりもうすぐ「この世」は終わり（「世の終り」（10-11））、すべてが御破算になってしまうのだから、「性」も含めてすぐなくなってしまう世俗の世界の事柄などどうでもいいことなので、今の現状を変えようとするのは無駄な努力だと考えられているのである。だから今の状態にとどまれということ

になる。「各自は、召されたままの状態にとどまっているべきである。召された時に奴隷であっても、それを気にしないがよい。たとえ自由の身になりうるとしても、むしろそのままでいなさい。」[4)]（7-20～21）そこでの発言がこういう現状認識に基づくものであること看過してはならない。

そしてもう一点忘れてはならないのは、そこで理論を支配しているのが典型的な「霊肉対置の二元論」であるということである。「霊」と「肉」、「霊の人」と「肉の人」、「内なる人」と「外なる人」、「見えないもの」と「見えるもの」、「信仰」と「見えるもの」、「霊に仕える者」と「文字に仕える者」等々が徹底的に二元対置されている。「神」にしろ「霊」にしろ「御霊」にしろ「聖霊」にしろ、（そんなものが実在することはありえないと確信する筆者のような者には不可解としかいいようがないが）ともかく「目に見えないもの」が圧倒的な上位概念として高みにおかれ、それに比して「目に見えるもの」、つまり「肉体」、「物質」、「外なる自然」等は極めて価値の低いものとして従属的地位におかれ、蔑まれるという思考の構造になっている。こうなると「肉」の最たるものとしての「性」の問題が軽蔑の対象とされることも容易に生じうる。全く本末転倒の逆立ちした論理と形容するしかないが、これがパウロに代表される使徒の論理なのである。（それどころかこの種の二元論はプラトン以降西洋二千年を貫く思想のバックボーンとして機能してきた。）「性」の如き下等な問題ははっきり超克したと確信しているらしいパウロは、「わたしとしては、みなの者がわたし自身のようになってほしい」（同 7-7）と独身でいることをすすめつつも、大部分の者にはそういう「自制」は無理だろうから、「不品行」を避けるための妥協案として結婚を容認するというかたちをとっている。ただ「第 1 コリント」、「第 2 コリント」の記述をみていると、その頃はまだキリスト教会が大きな勢力になる以前の段階で、パウロも各地に伝道旅行して信者を増やし教会の基盤がために腐心していることがわかる。そして信者たちの間の問題と信者でない外の世界の人々の問題を分けて考えている点が重要である。

「不品行な者たちと交際してはいけない」（第 1 コリント 5-9）という意味は、信者のうちで、「不品行な者、偶像礼拝をする者、人をそしる者、酒に酔う者、

略奪する者があれば、そんな人と交際してはいけない、食事を共にしてもいけない」（同 5-11）ということだとわざわざ説明されている。それは信者以外の外の世界ではそんな不品行等を行う人はいくらでもいたことを示している。そういう者と一切交際してはならないとすれば、「この世から出て行かねばならないことになる」（同 5-10）、つまり「この世」で生きていけなくなるとして、迫害されがちな少数派として外の世界との妥協の必要性を暗示している。従って「性」に関する「禁欲」要求は信者内部の世界の話で、それ以外の外の世界ではあまり顧みられることもなかったと思われる。勿論当時のキリスト教徒たちは「裁きの日」には清い信者だけが救われ、「永遠の命」を得るのに対して、外の世界の者はひどい罰を受けると信じていたのであろう。

パウロのとくキリスト教が男性主導型の独身を最善とするものであったことは確かであり、当然「性」の問題もネガティブにとらえられていたことは疑いない。これは逆の面からみると、女性蔑視を公然と主張する差別的な考え方であり、もっと悪いことに女性を罪の元凶とする見方にすぐ行きつく傾きをもっている。エバが最初に罪を犯した（創世記第三章）ことも含めて、また男がはじめに造られ、その男のあばら骨から女が造られた（同第二章）こともふまえて、「すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神である」（第 1 コリント 11-3）といわれている。それは「なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのだからである。また、男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのである」（同 11-8 ～ 9）という理由付けで補強される。ここには女性を罪への誘惑の源として斥けるべきだとする、いわれなき差別主義の始まりがうかがえる。

しかしキリスト教も成立当時は弱小な新興宗教の一つにすぎなかった。数も定かにわからない程多くの神々が祭られていた典型的な多神教国としてのローマ帝国においては、どんな神を祭ることも自由で、多くの神々が対立することもなく共存していた。キリスト教もそれらの神々と並列的に平和共存していれば迫害されることもなかったであろうが、神は一つとする一神教的立場だけはあくまで固持し、非妥協を貫いたため、時代によって差はあれ、さまざまな

迫害を避けることはできず、それはコンスタンティヌスによるキリスト教公認まで続いたようである。古代ローマ帝政時代の多くの神々も、いわゆる宗教というよりも、現世利益を願う人々が尊崇したもので、一種の習俗に近いものであったと考えられる。そしてキリスト教の「禁欲」道徳を守ろうとする狭い信者集団の外に、そんなことにはまるで頓着せず、世の快楽を謳歌する大きな世俗の世界が広がっていたのである。そこでは「性」は制限されるどころか、「性」の解放は極限に近づき、羞恥心を忘れ去った性的放縦はとどまるところを知らなかったといわれる。それはローマの詩人ユウェナリス（58-138）が「……あらゆる悪徳が頂点に達した」と嘆くほどであった。しかし風刺詩人の警告が効果を及ぼした形跡は全くない。そしてその責任はたいてい女性の側に求められるのが常であった。パウロのいうように性行為を罪だと考えるなら、女だけが悪いという理屈は成り立たない。男と女がいなければ成立しない事柄なのに、女の側にだけ罪を負わせるのはそもそもおかしいし、そんな理不尽な話はないからである。[5] ここでも古代世界で支配的であった、男性優位、女性劣位という考え方が大きく影をおとしている。パウロも古代人の常として、奴隷制はもとより、女性を罪の源として排斥することに何の抵抗も持っていないのが印象的である。しかし女性を諸悪の根源の如く悪者に仕立てあげることと「性」そのものを槍玉にあげることとの間には差がある。「性」の享受は維持しつつ、風俗壊乱の責任をもっぱら女性におっかぶせる身勝手と「性」そのものを禁忌の対象とすることの間には距離がある。といっても埋まらないほどの差でもないともいえる。というのもキリスト教成立期の教会においては、ヘブライの女性蔑視を自明の前提とする伝統的思考の影響もあって、女性は「誘惑の象徴」であり、「魂の救済」にとって危険な存在とされていたので、女性から離れることの必要性は受け入れられやすい状況にあった[6] と考えられるからである。そして「女性からの逃避」は、結果として必然的に「性からの逃避」になるからである。

しかし考えてみれば「禁欲」というのはやっかいな概念である。それは通常の社会生活においても、それとは意識されなくても、ある程度は実践されてい

る。しかしその限度を超える「禁欲」は人間の生存条件に直接抵触するものであるだけに、問題とならざるをえない。このような明らかに「反自然的」、「反社会的」ともいうべき「禁欲」をそれでも是としようとする考え方がどうして出てくるのであろうか。

「禁欲」思想は別にキリスト教の専売特許ではない。それ以前の時代から既にある。それはユダヤ教にもユダヤ人集団テラペウタイ[7]（癒す者）にも『死海写本』で知られるエッセネ派[8]にもうかがえるし、既にみたようにプラトンやストア派にもみられる。それはまたキリスト教の異端として迫害排斥されたグノーシス派にも顕著にみられる特徴である。こういう思想は、現世を常にうつろいゆく、はかないものとみる無常観に立って、そんな当てにならない不確かなものにとらわれることは愚かであり空しいと感じる発想があれば、すぐさまそこから出てくるものなのであろうか。たとえば戦乱や疫病の蔓延によって多数の人間がバタバタと死に死体の山を築くようないわば「この世の地獄」が出現するとき、すべての人間がそこから人生のはかなさと無常を感じ、それにとらわれるものなのだろうか。どうもそうとは思えない。社会の底辺で生きる多数の民衆はもっとしたたかなのではあるまいか。案外人生そんなものと割り切って状況に対応し、けっこうねばり強く生きていくのではないか。人生の儚さを感じたりするのは、そんなことを考える余裕のある頭でっかちの少数のインテリ層にかぎられるのではあるまいか。健全な一般大衆は元来「禁欲」などといった不健全な思想にはなじみにくいものの筈だ。にもかかわらず「禁欲」思想が広範に影響力を及ぼしうるとすれば、それはそのイデオロギー性によると考えるしかあるまい。支配的イデオロギーは支配階級のイデオロギーであるという命題が正しいとするならば、知を唯一の武器として支配階級に奉仕することを職務とする知識人のイデオロギーが優位を占めるのは当然である。知という点での弱者は、知を用いて、つまり理屈で反論する能力は持ちあわせておらず、被支配者としては知という武器で攻められると抗しがたいであろう。「禁欲」などという不自然極まる思想がそれでも幅をきかせうるとすれば、それが支配構造を支え動かしてゆくイデオロギー的に有効な力を発揮しうるか

らとするしかない。

もっとも「この世」の空しさを嘆く者がそのまま虚無に身をゆだねたままであることはほとんどない。たいていはその対立概念を、天国であれ神の国であれ、「あの世」を持ち出すものである。至るべき目標、救いの道はあらかじめ想定されているので、あと残るのはどうやってそこに至るかという問題だけである。「この世」と「あの世」は相関関係にあるいわばシーソーのようなものである。「この世」がみすぼらしく描かれれば描かれるほど、「あの世」は光輝くことになる。「この世」が過小評価されればされるほど、「あの世」の評価は上昇する。「この世」が軽んじられればそれだけ、「あの世」は重視される。「あの世」が美化されればされるだけ、「この世」は醜悪で見るに絶えないものにまでなりさがる。実は「あの世」などただ考えられるだけのもの（Gedankending）にすぎないのに。「この世」以外に世界はない、「あの世」も「神」もないと考える筆者のような不心得者には理解しがたい発想であるが、それが昔から支配的であった事実は認めないわけにはいかない。

それを信じる者にとって問われるのは、どうやってその目標に到達し救いを得るかということになる。これにも、便宜的区分にすぎないが、いわば「自力」でと名づけるべき方法と「他力」とよぶべきものがある。

パウロなどは「他力」の例に入るのではないか。なぜなら彼の考えでは「神」のもたらす「この世の終り」（第1コリント 10-11）がさし迫っており、「新しい世」を招来するのは「神」であって、人間が関与しうることはないからである。人間にできるのは「神」を「信じる」こと、イエスをキリストとして「信じる」ことぐらいであって、あとはもうすぐ消え去ってしまう「この世」の空しい欲望などに執着したりせず、身を清く保つこと（「禁欲」）ぐらいしかないのである。この場合も「この世」を軽んじ軽蔑することが、「この世」のあり方を無批判にそのまま受け入れる現状肯定のイデオロギーにしかならないことにパウロは全く気付いていない。だから「すべての人は、上に立つ権威に従うべきである。なぜなら、神によらない権威はなく、おおよそ存在している権威は、すべて神によって立てられたものだからである。」（ローマ書 13-1）

などと現状をそのまま正当化する台詞を平気で吐くことができたのである。二千年たっても来ない「世の終り」が今にもくるかのように絶叫するパウロ的狂信に動かされた人は少なくなかっただろうが、後からみると詐欺師まがいのまことしやかな講釈と何ら変るところがない。これが今でも聖なる書としてあがめられているのは、喜劇であり同時に悲劇である。しかし終末論は手強い。それはもはや理屈の問題ではないからだ。キリスト教に限らず、いろいろな他の宗教にもそれはみられる。それは何度も何度も歴史の上に現われては消えることを繰り返してきた。中にはそれの起こる日時まで指定し結局はずれるようなケースも少なくない。にもかかわらず同じことが性懲りもなく繰り返されるのは、それが主張される時点ではまだ未来の事柄で、真偽の判定ができないという事情をうまく利用しているからである。特に人間は不安定な状況におかれると、何かにすがりたくなり、いわれることをそのまま「信じる」ことになりやすい。思考力のない者、疑うことの重要さがわからない者は、過去の歴史から学ぶことを知らず、安易に「信じる」方向にかたむくことになる。「考える」より「信じる」方がはるかに楽だからである。しかも世の教育システムというのはすべからく、そういう思考力のない人間を大量生産することを自らの使命としているとしか思えない。体制に反抗するような生意気な輩はそれによってあらかじめ去勢されおとなしくさせられる（ロボトミー）からである。「信仰」は人間を安心させるという効用と引きかえに、とんでもない方向に人間を連れていったり、驚くほど残酷なことを平気で行わせる狂気と隣り合わせにあるものである。パウロはあくまで「神」に奉仕していると信じて疑わなかったろうが、その実、時の権力者、支配者に奉仕することになっていたのだが、そして後にキリスト教会が権力者の立場に立って支配するための種をせっせと播いていたのだが、そんなことはいささかも彼の念頭には浮かばなかっただろう。

パウロの例を「他力」とするならば、「自力」の例は修道士の修業としての「禁欲」に求められるのではないか。三世紀にはすでにキリスト教団から離れ、砂漠にひきこもった禁欲主義者がいたらしい。彼らが求めたのは何にも邪魔されることなく観想の生活を営むことであって、それによって神を観ること、神

と一体化したような神秘体験（エクスタシス）を得ることであった。従って誘惑の象徴であり、魂の救済の妨げとなる女性を自発的に避けることが必須の課題とされたことはいうまでもない。これは「禁欲」という実践（手段）を通じて、主体的に一定の境地（目的）に至ろうとする努力であったと考えられる。

ここで「自力」の系譜につらなるものとして、グノーシス主義に触れておきたい。「知識」を意味するギリシア語「グノーシス」に由来するグノーシス主義者という名称は、そう呼ばれた彼ら自身が名のったものではなく、彼らの思想を常に論駁、否定、排斥しようと試みたキリスト教正統派のいわゆる反異端論者たちが用いた通称である。[9] グノーシス主義は、原始キリスト教の単純素朴な二元論（現世と神）にあきたらない当時の知的エリートが考えだした手のこんだ神話的教義をもち、その担い手たちはローマ帝国内にその理論を広めるべく努めたようである。しかしその教義は、天地の創造者としてのキリスト教の神を「デミウルゴス」として一段低い存在とするものであり、本当の神は創造などという愚行をする神をはるかに超えて上に位置するものだと主張した。彼らは「この世」はその劣った神が創造したもので、キリストがその汚れのるつぼのような肉体に具現する筈もなく、肉体の中で苦しんだりするはずはないと考えた。また使徒ペテロに基づく教会に対して、自分たちこそ本当のキリスト教徒なのであり、キリスト自身が本当の言葉を自分たちに啓示したのだとした。『旧約聖書』の神はもはや正義の神ではなく、欺瞞の神である。この神は、人間に自らの神的な起源を忘れさせるために、運命の重い鎖で人間を縛ったというのである。「真の神」（至高者）[10] は創造などとは無縁に、無限の光の中にひとり存在しているのである。人間は劣った神が創造したこの世界の暗闇にとじこめられているのだから、そんな「この世」から逃れ出て、自分自身で「グノーシス」によって、本当の神を見出し、否その神と一つにならねばならないのである。もっとも堂々とこんな主張をしていたのでは、自分たちの足もとを掘りくずすものとして危機感をいだいた、正統と自認するキリスト教会側からの反発は避けられず、教父たちはグノーシス主義者たちを異端者として目の敵のごとく徹底的に攻撃し、排除しようとした。形而上学的な高みを目指す観

想的神秘主義とも称すべき知的エリート集団が、現実との妥協を得意とし、万人のための宗教たろうとするキリスト教会に対抗できるはずもなく、政治的闘争（迫害）に敗れたグノーシス主義者たちは歴史の表舞台から姿を消すことになった。彼ら自身の文書はあまり残っておらず、反駁のために教父たちが引用したものによって彼らの姿がうかがえるというのも歴史の皮肉である。

ともかくグノーシス主義にとって、「禁欲」の実践が必須であったことは間違いない。物質的な世界や人間の肉体を軽蔑し無価値とする態度から、グノーシス主義はついに結婚や出産の否定にまで至った。これはおよそ実行不可能な思想であるが、それが論争を重ねるうちに、キリスト教の「禁欲」思想に影響を与えたことも忘れられるべきではない。というよりも「禁欲」思想という面では両者に共通する点が多いことに着目すべきであろう。つまり物質的世界としての「自然」の否定、或いは「この世」、「現世」の否定、特に「肉」の否定である。逆の面からいえば、（そんなものがあるとは到底思えないが）「霊的世界」としての「あの世」、「彼岸」の強調である。これが本末転倒の逆立ち思考であることはくり返すまでもないが、問題は何度もいうようだが、こういう発想になぜ人間は惹かれるのか、またなぜそれが力を持ちうるのか[11]ということである。

「禁欲」の問題が一番顕著なかたちで出現するのはやはり「宗教」の領域においてである。欲望は本来人間の生を促進する原動力であるから、それを制限しようとする「禁欲」には抵抗があって当然である。生来人間は欲望に溺れやすい存在であるから、それを防止すべく「禁欲」道徳が主唱されてきた事情は理解できないわけではないが、それがいきすぎるとその弊害も大きくなる。「禁欲」は本質的に促進されるべき「生」に敵対するという負の側面を不可避に伴うものであるだけに、それが必要以上に影響力を持つ事態は決して好ましいことではない。何らかの目的達成のための手段であったはずの「禁欲」が、それ自体価値とされ、徳として目的そのものとされることが、こと「宗教」の領域ではしばしば生じてきた。それが人間の生き方を大きく制約し、憂慮すべき働きをしてきたことは、歴史が数々の事実として証示していることではない

か。

勿論それは一つのイデオロギーであるが、慣習、生活習慣といった習俗次元にも入りこんで力をふるうものであるだけに、その働き方を見極めることは大事な仕事になる。実際の日常生活にまで入りこむような力は、特にそれとして意識されにくいし、また問題視されにくい。また一般の人々はそこを深く考えるといったことが元々苦手ときているので、それを対象化するという問題意識は普通顕在化してこない。だからこそ一度じっくり吟味してみるに値する課題といえるのではないか。

宗教の問題が一筋縄でいかない理由の一つは実はそこにある。通常、宗教が問題にされる時、ほとんどすべてがその考え方、思想という側面に焦点をあてる考察になる。（これは何も宗教の問題だけでなく、哲学においても事情は同じである。）そしてもっと悪いことに、思想だけで一つの世界が成り立つかのような致命的錯覚が大手をふって闊歩している現実がある。しかもそれに違和感を持つ人は少ない。そんな馬鹿な話はない。思想は一定の社会の中で生きている人間の頭脳が生みだすものである。それが一定の効力をもって社会のあり方を規定するものである以上、そのイデオロギー性を明確にすることが求められるのだが、思想だけで独自の世界が構成されるとするのでは、その基盤にまで及ぶ深い追及はほとんど望めない。思想の担い手である人間の現実の生き方にまで考えを及ぼさないと、それこそ上つらを少し撫でるだけのことにしかなるまい。思想はたしかに人間の生き方を支えるものであるが、何もないところから突然湧き出るわけではない。それはその人間が生きている生活の基盤そのものに不可避的に制約されるかたちで出現するものである。思想にはたしかに論理性が求められる。従ってそこで論理的整合性が要求されるのは当然である。しかしそれだけで議論が可能だとするところには救いがたい欠陥がある。そして思想だけを独立に扱うというあり方が現実を十分把ええないということだけが問題なのではない。先に思想は現実の社会に影響力を持つといったが、問題はその影響のあり方にある。思想だけで事足れりとするやり方は、現実に肉迫する力を持ちえないというだけではない。その現実を変えていく力になり

えないばかりか、その現実をそのまま保守的に維持し固定する力としてしか機能しないことになりがちであることが問題なのである。

思想のレベルに限って問題を扱うことはいうまでもなく楽である。だから多くの思想家がそのあり方を疑おうともしなかったし、今もしないのには十分な理由がある。その方が余計なことを考えなくてすむし、第一考察範囲が著しく限定されるので仕事がやりやすくなる。つまりそういうやり方で考察範囲を限定することは、実際には複雑に入りくんだ思想と現実との相互的な因果関係の問題に入りこまなくてすむというメリットを持っている。しかしそのことが、思想が現実の社会に対してインパクトを持ちえないことの、またただの観念世界の遊戯に堕しがちであることの主要原因をなしているのである。なぜこの点にもっと注目が集まらないのか。

宗教を論じる場合でも、その思想だけに焦点をあてるようなやり方では、何ら現実に肉迫するような仕事とはなりえない。宗教を担う人間がまず生身の人間であることから出発するしかない。その人間がどんな社会のどんな階層に属し、どのように生計の資を得ているのかを問題にせねばならない。たいていの人間は働いて生活費を捻出せねばならない立場にある。働かなくて食っている人がいるのは、その人の代りに何倍も働いている人がいるからであり、他人の労働の産物である富を収奪する能力にたけていたり、それができる立場にいるからである。従って多くの富をたくわえ、全く働く必要のない人がいるとしても、原理的に考えれば、その人の存在を可能ならしめるために、他の多くの人の労働が投下されているのである。世の中というものは、機械化が進み生産性がいくら向上しても、それによって生みだされた富が均等に配分されるなどということはなく、ほとんどの場合富を独占する少数の富者と多数の貧者に分かれることになってしまう。民主主義は本来それを均らし、できる限り個人の権利を伸張し、不平等の是正をはかる試みのはずだが、それがあまりうまく機能していないことは、世界中のどの社会をみても認めざるをえない事実である。それはその支配体制を維持しようとする力がたえず、それとはわからないような巧妙なかたちで働いているからである。あまり意識されることはないが、宗

教もまた教育も、その洗脳能力によって、立派にその一翼を担っているのである。

出発点は、「禁欲」というのはいかにも不自然な、不健康な発想ではないか、なぜそういう不健全なイデオロギーが力を持ちうるのか、という素朴な疑問であった。だが考えてみれば、「自然」といい、「身体」といい、「感性（官能）」といい、それらは西洋の思想では一貫して従属的な地位におかれてきたことに気づく。精神（魂）が身体に優位するとする転倒思考の根は深い。しかしこれはおかしいのではないか。西洋の社会はそのことによって健全さを失い、いびつなものになるという犠牲を払ったのではないか。生は本来、健全に活発に促進されるべきものである。それがまさに自然なのだ。「生」も「性」も本来健全なものであってしかるべきではないか。それを抑圧するイデオロギーが正しいはずはない。我々はこれを健康―病気という対概念で考えればいいのではないか。つまり「宗教」を一つの病気と考えればすべて説明がつくように思われる。病気であることが価値なのだという転倒が生じさせられているのである。禁欲主義的道徳が最も威力を発揮する「宗教」の領域においては、それを専門の職業とする聖職者が、従順な羊を洗脳し支配するために「禁欲」イデオロギーを巧みに活用する。「お前たちは元々罪人なのだ。それどころかいつも罪を犯しているのだ。性はまた女はその最も危険な陥穽なのだ。」と脅していうことをきかせる。知識を武器に特権的に支配する立場の人間がいうことに無知な一般人がどうしてさからえようか。しかし「人間は元々罪深い」などということがどうして言えるのか。原罪説ほど愚かな教説はない。そんなアホな話を真にうけてはいけない。そんなアホなことを言うやつは病気なのだということに気がつかねばならない。そこでは正しいことが間違ったことにされ、間違ったことが正しいとされている。病気の者が正常で健康、正常で健康な者が病気（異常）なのだ。なんという見事な転倒。生を営む人間が「生に敵対する」のは明白な自己矛盾である。ニーチェを持ちだすまでもなく、「禁欲生活は自己矛盾」[12]（系譜Ⅲ、11）なのである。しかし聖職者はその自己矛盾を正当化す

る。生命力の衰退を生の勝利だといいはり、反自然を正義だといいくるめる。彼らは生を否定することによって生を支配しようとするのである。「病人であることが一番いいことだ」と説教する聖職者自身立派な病人なのだが、自分が病気であるという意識（病識）がない。勿論迷える羊たちにもわかるわけがない。こうなると教会は医者も患者である「精神病院」（系譜Ⅲ、14）にたとえるのが一番適切ではあるまいか。

禁欲主義がこれほど自然に反するものなら、健全な生に敵対するものなら、なぜそんなイデオロギーが力を持ちうるのか。それは「現世」の支配者がその支配を維持し貫徹するのに有用だからである。ありもしない「あの世」に人々が関心を向けてくれれば、「この世」に向けられる関心は減少する。「この世」の状態をそのまま維持したい者にとっては、これほど都合のいいことはない。「宗教は民衆の阿片である」（マルクス）はまたとない名言である。阿片が好まれるのは、そこが阿片を必要とするような社会だからである。たしかに阿片を必要とするような社会がいい社会であるはずはない。しかしそこで阿片自体を否定したところで何にもならない。本当の問題解決があるとすれば、阿片を必要とするような社会を変えることしかない。

註

1）Historisches Wörterbuch der Philosophie Bd.1（hrsg.）J.Ritter Schwabe & Co.Verlag Basel/Stuttgart. 参照。

2）ストア派の源流としてのキュニコス派の哲学のうちに既に明確な禁欲思想がみられる。理論よりも実践を重視するこの派では、快楽を断ち骨折りと労働によって道徳的鍛錬を行うことが求められた。どんな欠乏、困難、侮辱にあっても心が動揺することがないような「精神の平静」を得ることが目標とされたのである。特に快楽の蔑視が強調されたが、その理由は欲望にとらわれると、それを満たそうとして内心の自由を失ってしまうと考えられたからである。従って欲望に押し流されないこと、つまり禁欲が重視されたが、それは禁欲そのものが目的とされたわけではない。欲望を満たそうとすると、自分ではどうしようもないものに依存せざるをえなくなる。即ち必然的に束縛にまきこまれると考えられたのである。彼らにとっては、社会制度、国家組織なども含めて一切の文化的なものが束縛と考えられ、そういうものから脱却した状態で得られる心の自由、心の平静こそが最高の価値として求められたのである。この単純実践主義ともいうべきキュニコス派に学問的基礎づけを与え、一層洗練発展させたのがストア派の哲学である。従ってストア派も当然反快楽主義（禁欲）をうけついでいる。そこでは、人間が根本において求めるのは生存の維持で

あり、食物摂取もそのためのものであり、快楽が求められているわけではないと考えられている。快楽はたまたまその結果として随伴する現象にすぎず、それゆえ快楽を目的そのものと考えることは本末転倒とされる。これは当然性行為にもあてはまる。これが後のカトリック教会の主張とほとんど変わらないのはおもしろい。

3）日本聖書協会版の口語訳聖書では、「……また天国のために、みずからすすんで独身者となった者もある。……」となっているが、適切な訳とはいいがたい。ギリシア語原文もウルガタ、独訳、英訳もはっきり「去勢者」となっているからである。「……自分で自分を去勢した者もある。……」とすべきであろう。ただしこの部分はイエス自身の言葉ではないと考えられる。オリゲネスも自ら去勢した一人である。

4）前掲口語訳聖書では「しかし、もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりなさい。」となっているが、正しい訳ではないと考える。「現状を変えるな」といっているのに、何故そこだけ例外にしようとするのか。それでは文脈に合わないし、語学的にも正しくない。

5）当時も女性にだけ罪をきせるのは不当だと極めてまっとうな主張をした者も少しはいた。たとえば哲学者ムソニウス・ルーフス（30～108）がそうである。「戦争よりもはるかに始末の悪い敵である風俗の退廃」（ユウェナリス）を慨嘆する者でも、たいてい快楽のもとになる女性の部分を「悪霊の門」ときめつけたりして責任をすべて女性におしつけて恥ないのが普通であった状況において、ルーフスのような意見は貴重であった。彼は女性にばかり求められている性道徳を男性自身が守るべきだとし、男性優位社会の都合で女性が無知の状態にとどめおかれていることに問題をみたようである。女性に教育を与えて男女同権を実現しようとするような考え方は、現在ならば当然視されるものだが、二千年前の古代では残念ながら受け入れられる余地がなかった。気の毒なことに男性から反発をくらうだけでなく、女性の側からも支持されなかったのである。ちなみにルーフスはエピクテートス（c.60-c.138）の師であったとされる。パウル・フリッシャウアー著、関楠生訳『世界の風俗史』2（河出文庫）参照。

6）朝倉文市『修道院』（講談社現代新書）参照。

7）アレクサンドリアのフィロンは『瞑想的な生活について』という著作の中で、人生の目標は瞑想であるといって現世を否定し、排他的に生きるユダヤ人集団「テラペウタイ」に言及している。彼らは肉は食べず、パンと塩で生活していたといわれ、酒は人間を狂気に追いやる狂い水であり、美味な食物は飽くことのない欲望をいだく人間をますます情欲にかりたてるものとして禁じられていたとされる。朝倉前掲書による。

8）フィロンはまたエッセネ派についても語っている。彼らは魂に致命的悪影響を及ぼすものとして、都市に住むことを避け、その外部の村落に居住し、兄弟のように共に住み、来る者は拒まず、全員が一つの会計を持ち、共同の支出をし、衣類を共有し、共同の食事をする際には食物も共有する。あたかも原始共産制を想起させるかの如く、共同の居住、共同の生活、共同の食事をこれほど確実に実践している人々はほかに見出すことはできない、といわれている。

　また大プリニウス（23～79）も『博物誌』の中で、エッセネ派の人々に触れている。「死海の西側だが沿岸の毒気地帯の外部に孤独な一族エッセネ派がいる。これは全世界の他のすべての種族以上に珍しい種族である。というのは彼らは婦人というものを持たず、すべ

ての欲を絶ち、金銭を持たず、ただ椰子の木のみを友としているからである。日々、人生に疲れ、運命の波によってそこに追いやられた人々が多数、彼らの生き方を採用するために加わることによって補充せられ、同じ数を保っている。」彼らは、この世の終末には神から選ばれるイスラエルの民だと考え、聖性を求めて禁欲生活を実践する一団であったと考えられている。朝倉前掲書による。

9）マドレーヌ・スコペロ著、入江良平、中野千恵美訳『グノーシスとはなにか』（せりか書房）参照。

10）荒井献『トマスによる福音書』（講談社学術文庫）参照。

11）「禁欲」思想について語る場合、M・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳、岩波文庫）に触れないわけにはいかない。しかしそれを詳論するべき場合でもないので、手短かに言及するにとどめたい。近代ヨーロッパの資本主義成立以前にはおよそ利潤追求を目指す営利的活動などは倫理的によくないものとみられる傾向があった。ところが近代に至ってそれが倫理的に正当なものだとする転換が起こった。その転換の決定的要因となったのが禁欲的な「プロテスタンティズムの倫理」であったとするのがヴェーバーの主張である。彼はそれを有名な「職業召命観」によって説明する。ドイツ語の Beruf も英語の calling も同じように「神のお召し」と「職業」という二つの意味を含んでいる。そこからプロテスタンティズムに特有な倫理観として「世俗的な職業にいそしむことこそ神によって与えられた我々の使命なのだ」という見方が生じる。ルターは「人が義とされるのは信仰のみ（sola fide）による」とする義認論によってカトリック教会を批判したが、それは同時に専門の聖職者の業を上位におく業績主義への批判でもあった。世俗の世界を軽蔑しそこから離れた環境でいとなまれる修道院的な生き方は、世俗の義務から逃れる利己主義でしかなく、神の与えた使命に反するとみられるに至る。ただルターではまだキエティズム等の思想の残滓が影響を及ぼしていたためもあり、「職業召命観」は十分徹底されるに至らなかった。それを更に一層推し進めたのが予定説に立つカルヴァン派であるとされている。世俗との断絶を特徴とする「世俗外禁欲」は「世俗内禁欲」へと転換され、職業労働が神聖視されるようになったというわけである。なかなか巧妙な説明であることに感心させられる。また「宗教改革が人間生活に対する教会の支配を排除したのではなくて、むしろ従来とは別の形態による支配にかえただけだ」（訳書 17 頁）という冷静な分析もすぐれている。ただ不満もある。それは「予定説」のような愚か極まる考え方がなぜあれほど力を持ちえたのかという点の説明が不十分ではないかということである。永遠の昔から救われる人間か否かが神によって決められているとすれば、そして人間誰もどちらに入るか自分ではまるでわからないとすれば、現世でどれだけ善行を積んでもまた積まなくても同じだということにならないのだろうか。それでも努力をする気がわいてくるのかという疑問が残るのである。だから「予定説」に立ちながら、現世における職業労働にいそしむことでなぜ救いの確証がえられることになるのかがわからないのである。だからこそ「予定説」のような馬鹿馬鹿しい教説がなぜあれほど力を持ちえたのか、そこが知りたいのであるが……。

12）F. Nietzsche : Zur Genealogie der Moral（1887）